

# New Definition of Design

Vol.21

## Pepe Heykoop



ペペ・ヘイコープ

1984年、オランダのライデン生まれ。デザインアカデミー・アイントホーフェン在学中に、ユルゲン・ベイとベルトヤン・ポットの事務所でインターンシップを経験。2008年卒業後、自身のスタジオを設立。インドの貧困層支援を目的とするタイニーミラクルス基金に参加し、10年からムンバイにも製造拠点を持っている。

### デザインの新定義

今年1月のimmケルン家具国際見本市で、ペペ・ヘイコープの「Paper Vase Cover (ペーパーベースカバー)」がインテリア・イノベーション・アワードを受賞した。これは、プラスチックボトルの再利用を促すものであると共に、インドの貧困層を支援するプロダクトでもある。ヘイコープは、手作業を重視したアプローチを通して、社会的な問題解決を目指している。

#### 自然体で、社会に目を向ける

——あなたが学んだデザインアカデミー・アイントホーフェンでは、誰から影響を受けましたか。

1年生の時の教師だったユルゲン・ベイ(コンセプチュアルな作風で知られるオランダ人デザイナー、1965～)と、ベルトヤン・ポット(素材の特性と手作業を重視するオランダ人デザイナー、1975～)です。二人の異なる視点に触発された私は、それぞれの下でインターンシップを経験しました。

——近作「ペーパーベースカバー」のコンセプトを説明してください。

インドへ行くといつも、パッケージ、ボトル、袋などプラスチックのゴミが路上に大量に散乱しています。特にプラスチック製のボトルは世界のどこにでもあって、ものすごいペースで増えています。私は、世界中の人々が直面しているこの事実を踏まえたデザインをしたいと思ってきました。そこでボトルにドレスを着せて、花瓶にすることにしました。ペーパーベースカバーは、平らに畳むことができ、封筒に入れて発送が可能です。またこの製品は、タイニーミラクルス基金とのコラボレーションにより、ムンバイの貧しい家庭の女性たちが製作しています。最近もムンバイを旅して帰ってきたところですが、彼女たちとの仕事はともうまくいっています。この基金は私の従兄弟が設立したもので、共同で運営しています。

——あなたはデザインのプロセスにおいて、手描きのドローイングやハンドメイドを重視していますが、それはなぜですか。

そうすることによって、プロダクトに魂が吹き込まれるからです。私は、ベルトコンベアの上で出来上がっていく製品には興味がありません。見た目と、プロジェクトの背景にある

ストーリーとのコンビネーションが、ものの魅力を形づくるのです。

——現在は、3Dプリンターなどの普及により、ものづくりやデザインのプロセスが大きく変わりつつあると言われています。このトレンドについてどう思いますか。

それを「トレンド」と捉えてもらえるなら嬉しいです。ではリサイクルやリユースによってものをつくるのはトレンドでしょうか？ 廃棄物を使って、自分自身の手でものをつくるのは、私にとってとても自然なこと。これが私のクリエイティビティの根幹です。その中で、あらゆるプロセスで新しいやり方を探求することが、既存の障壁を壊してイノベーションを起こすための一つの方法だと思います。3Dプリンターを使う人々を否定するわけではありませんが、私の好みではない。そもそもそうやってできたものを、自分が気に入ることはまずありません。

——リサイクル素材を使ってデザインする際のポイントは何かですか。

デザインはパズルを解くのに似ていますが、廃棄物や身の回りにあるものを使ってデザインする時は、特にそうです。頭の中でパズルのピースを組み立て、実現していくことで、美しさが生まれます。すべてはトライ＆エラーであり、実験であって、失敗に対してオープンであるべきです。デザインには、それらの経験がどこかに必ず反映されます。

——デザイナーとして、これからどんな活動がしたいと考えていますか。

2年前、私は友人たちとアムステルダムで自宅を改装しました。その建物は腐りきっていて、建て直すと言うほうがふさわしい状態ではありませんでしたが、そのエリアは街の中でも古い家が多く、歴史があり、現在は素晴らしい住まいになっています。私は新築の家には住みたくありません。家とは、ストーリーが息付いている場所であるべきです。将来は、ものから空間へと領域を広げ、そんなプロジェクトをもっとやってみたいと考えています。



「ペーパーベースカバー」は紙製で、フラットバックされたものを広げ、使い終わったボトルに被せて花瓶として使う。ムンバイの女性が製造し、彼自身のウェブサイトなどで販売されている(撮影／Annemarijne Bax)